

インタビュー

急性および慢性下痢における
高繊維食の使いどころ

犬に多い大腸性下痢。

この症状に対するアプローチとして、
高繊維食は現在どのような立ち位置にあるのか、
急性下痢および慢性下痢の捉え方と合わせて、
大野耕一先生にお話をうかがった。

大野 耕一 先生

動物医療センターPeco
アジア獣医内科設立専門医



—先生は普段から高繊維食に対してどのような考えをおもちでしょうか。

大野：私は以前から比較的高繊維食を使うほうだと思います。若い先生方の多くは消化器用フードというと高消化性食や、低アレルゲンのフードを想定し、慢性的な消化管の疾患に高繊維食を選ぶ頻度はあまり高くないように思います。ただ、大腸性下痢のとき、私は長らく高繊維食を使用していますし、以前は下痢の際は高繊維食一択という時代もありましたので、とくに私と同世代の先生方は使用している頻度は高いと思います。高繊維食は一定のニーズがあるような印象です。

—高繊維食を使用するのはどのような状況のときでしょうか。

大野：まず急性下痢、もしくは慢性下痢の2パターンに大別できますが、急性下痢はある程度の処置により数日で治まることがほとんどです。数日で治まる下痢に対して高繊維食に変更するという提案は説明が難しいところです。また、私は急性下痢で食事を変更する場合には直ちに食事を切り替えますが、飼い主は食事を段階的に変更すべきものだと思っている方が多く、急な食事変更をためらう方がいます。つまり、高繊維食は急性下痢の際は意外と使いどころが難しいといえます。また、急性下痢の際は薬剤の使用から入ることが多く、最初に食事変更から入る症例は多くありません。

—そうすると、この高繊維食は慢性下痢の症例に使用するということになりそうですでしょうか？

大野：おっしゃる通り、高繊維食は慢性下痢のほうが使用頻度は高いかと思います。ただ、よくあるケースとして、

来院時は急性下痢で薬剤を投与し治まったが数週間経ってまた下痢が再発し、これがくり返されるという症例です。再発をくり返す急性下痢を急性とよぶべきかどうかは議論の余地があります。このような症例では来院1回目は食事を変更しないが、2、3回と来院が重なってくると食事の変更を検討するわけです。1回ごとは急性下痢の病態ですが、下痢をくり返す場合は毎回薬剤を投与するのではなく、食事の変更により下痢の頻度を減らすことを検討します。そこで高繊維食の出番になります。

その際、飼い主へのインフォームド・コンセントとして「おなかが弱い」「腸内細菌のバランスが乱れている」などの表現をすることが多いです。腸活という言葉が浸透しているので、飼い主も納得いただけることが多いです。そのうえで腸内細菌を整えるような食事の選択を検討しましょう、とお話ししています。

—日常的に腸内細菌を整えるようなフードを食べさせることに意味があるとお考えですか？

大野：もちろん意味はあると思います。再発をくり返す犬の大腸性下痢を完全にゼロにすることはできません。ただ、飼い主には「ゼロにはできないが下痢を起こす頻度を減らしましょう」と伝え、第一に食事、第二にプロバイオティクスを紹介します。この2つにより薬剤をあまり使用しないようにできるといいですね、と説明することが多いです。

—ロイヤルカナンより、新しく犬用消化器サポート高繊維のウェットフードが登場します。「ウェットフード」という点で考えられるメリットなどはありますか？

大野：たとえば今のプロバイオティクスは粉タイプが多い

のでドライフードだと混ぜにくいと飼い主から相談が来ます。そこでウェットフードに混ぜて食べさせてくださいと伝えると、ではウェットフードは市販の一般食でいいですかという話になります。せっかくドライフードで高繊維食を与えているので、同じ高繊維のウェットフードがあると飼い主も納得いただきやすいです。嗜好性の変化に対応できる点、ウェットフードでないと混ぜるのが難しい点、この2点が私の考えるウェットフードのメリットです。

一ちなみに先生がフードを選択する際の基準としているものはありますか？

大野：論文データの豊富さなどは考慮に入れることが多いです。しかしそれでもフードの効果をはっきりと示すことはなかなか難しく、長期的に使用しないと効果を実感できないものは獣医師としてはなかなか使いにくいのが現状です。それでも今回の高繊維のウェットフードが発売されることで、高繊維食のなかで選択肢が増えることは、症例が食べ飽きたときに大きな利点になると思います。

以前、犬の急性下痢の調査を実施したのですが、急性下痢の症例は想定以上に多い、という感覚です。大学病院には急性下痢の症例は来院しないので、一次診療の現場に来てはじめて実感したところでした。約半数の症例は、止痢薬やプロバイオティクスでは短期的には良化しないこともわかりましたが、抗菌薬で速やかに良化しました。多くはその後再発しないのですが、約2割の症例では、下痢をくり返すことがわかりました。このような急性大腸性下痢をくり返す症例には、高繊維食を最初に試し、効果がない場合に低アレルギー食を使用するようにしています。

一下痢をくり返す症例に対して高繊維食を使用する場合は短期間で様子を見る飼い主が多いのでしょうか。

大野：再発をくり返す症例に対して食事を変更するわけですが、ある程度の期間観察しないとわからないので、短期ということはありません。その状況になっている時点で長期戦となります。少なくとも数ヶ月行い、飼い主が下痢の頻度が減ったと実感できた場合はそのまま続けてくださいと伝えます。そして、食べなくなる症例もいるので、そのときは食事を複数変更してすすめていく流れです。

一再発の原因は何なのでしょう？

大野：ひとことでいえば体質でしょうか。はっきりとはわかりませんが、母親から譲り受けた腸内細菌叢のクオリティが悪いのではないかと説明は飼い主にはよくします。おそらく生まれもった腸内細菌のバランスはそれほど変化しないのではないかと考えています。腸活をすることで改善できるが、腸活をやめたら悪くなるのではなく、元



ロイヤルカナン 消化器サポート高繊維ウェットフードは2025年6月16日より発売

に戻るとこのようなイメージです。プロバイオティクスは単に短期的な下痢の改善を目的とするものではなく、腸内細菌叢のバランス改善や腸管機能の正常化のために継続的な摂取が重要です。なので、下痢をくり返す症例の飼い主には再発のリスクについて最初に説明し、その下痢の頻度をどれだけ減らせるかを納得してもらう必要があると思います。

一くり返すというと実際どのくらいの期間を考えればよいのでしょうか。

大野：再発する症例は本当に1、2ヶ月でまた下痢になります。また半年後に再発というケースもあり、幅はあるように思います。

3週間以上におよぶ慢性間欠的な下痢は慢性腸症でもみられますので、急性大腸炎を1〜数ヶ月おきにくり返す場合も慢性腸症とっていいのかもしれませんが。しかし病院に来る場合には、前の経過がわからないことも多く、「急性大腸性下痢」という判断になることが多いです。飼い主から思い当たる原因をきくことはほぼなく、何も変わったことがないのに今朝から下痢をしていると説明する飼い主がほとんどです。

まとめると、犬の急性下痢のほとんどが原因不明の大腸性下痢で、そのうちの一部では慢性的に下痢をくり返します。8割は自然に治るが、2割は再発します。慢性大腸性下痢で継続的に軟便が続いている症例には、高繊維食を使用する機会は多く、今後は高繊維のウェットフードも併用してプロバイオティクスを混ぜて用いるという選択肢が増えることになるのではないかと思います。

一貴重なお話、ありがとうございました。